

図 7.3.8 アメリカ村でよく行く場所(複数回答)

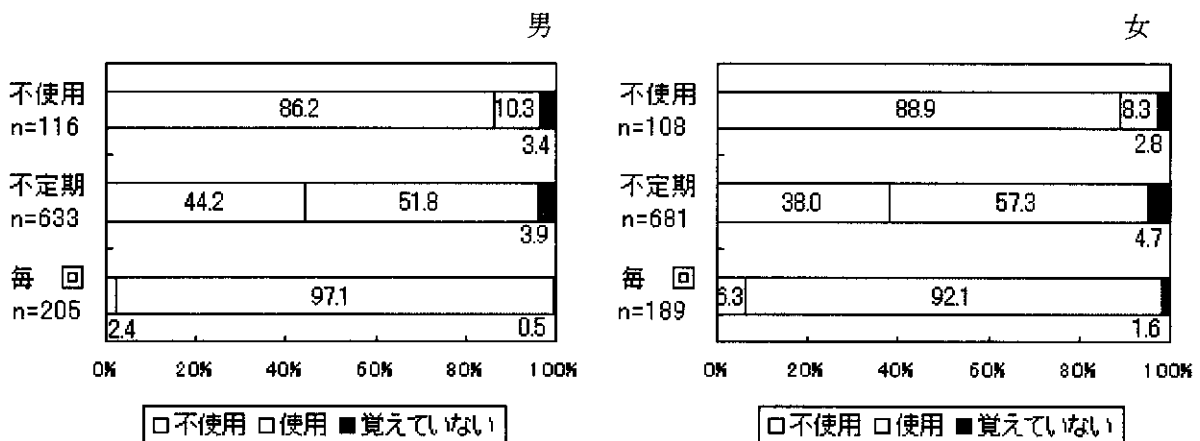


図 7.3.9 初交時の膈性交におけるコンドーム使用

これまでのセックス経験

性経験

最後にセックスをしたのが1ヶ月以内だったのは男性 69.6%、女性 73.6%、3ヶ月以内だったのは男性 80.2%、女性 83.6%であり、参加者の大多数が調査実施現在、性的に活発であった。これまでに膈性交の経験があったのは男性 99.7%、女性 99.3%、オーラルセックスの経験があったのは男性 87.2%、女性 85.0%、アナルセックスの経験があったのは男性 10.1%、女性 13.0%であった。

これまでのオーラルセックス経験をコンドーム使用行動別で見ると、不利用群(男性 89.5%、女性 79.5%)と不定期群(男性 92.1%、女性 91.4%)では毎回使用群(男性 73.3%、女性 69.4%)よりも経験者が多かった。アナルセックス経験についても同様で、不利用群(男性 23.0%、女性 13.4%)と不定期群(男性 9.0%、

女性 14.3%)では毎回使用群(男性 7.0%、女性 8.7%)よりも経験者が多かった。

避妊

これまでの相手とよく使った避妊方法(2つまで回答)は、男女ともコンドームが一番多く(男性 85.2%、女性 87.5%)、次いで膈外射精(男性 50.0%、女性 51.5%)であった。一方、避妊していない(男性 7.1%、女性 8.2%)という回答が男女とも三番目に多く、一部全く避妊をしていない現状もあることが示唆された。各性行为におけるコンドーム常用率は、膈性交時に男性 20.7%、女性 18.8%、オーラルセックス時に男性 4.2%、女性 3.8%、アナルセックス時に男性 22.9%、女性 13.8%であった。

これまでによく使った避妊方法をコンドーム使用行動別で見ると、不利用群では膈外射精(男性 54.8%、女性 54.5%)が最も多く、不定期群や毎回使用群では

コンドーム(不定期群男性90.7%、女性93.5%、毎回使用群男性98.6%、女性100.0%)が最も多かった。不定期群ではコンドームに次いで膣外射精(男性60.3%、女性61.7%)であった。不使用群で避妊していないと答えた人は男性26.6%、女性25.0%であった。

コンドーム入手方法

これまでのコンドーム入手方法(複数回答)は男性では、自分でコンビニで買った68.9%、自分で薬局で買った28.6%、友達にもらった26.4%、ラブホテル・ホテルに置いてあった25.7%の順であった。女性では、相手が持っていた65.2%、ラブホテル・ホテルに置いてあった29.5%、相手と一緒にコンビニで買った25.6%、友達にもらった20.8%の順であった。

これまでのコンドーム入手方法をコンドーム使用行動別で見ると(図7.3.10)、男性は不定期群、毎回使用群ともに、自分でコンビニで買ったが最も多く、自分で薬局で買ったが続き、女性は不定期群、毎回使用群ともに、相手が持っていたが最も多く、不定期群では自分でコンビニで買ったやラブホテル・ホテルに置いてあった、毎回使用群では相手と一緒にコンビニで買ったが続いた。

コンドーム使用理由

これまでのコンドーム使用の理由(複数回答)は、男女ともに避妊が一番多く(男性67.4%、女性73.2%)、二番目に病気予防(男性30.3%、女性29.1%)であった。次いで、男性ではなんとなくが19.4%、自分で持っていたからが16.8%であり、女性では相手が持っていたからが22.1%、なんとなくが13.4%であった。

これまでのコンドーム使用理由をコンドーム使用行動別で見ると(図7.3.11)、毎回使用群では妊娠予防、病気予防が不定期使用群より多かったが、不定期群では相手が持っていたから、なんとなく、自分で持っていたから、相手が言ったから、その場にあったからなどその場の状況に関することが毎回使用群より多かった。

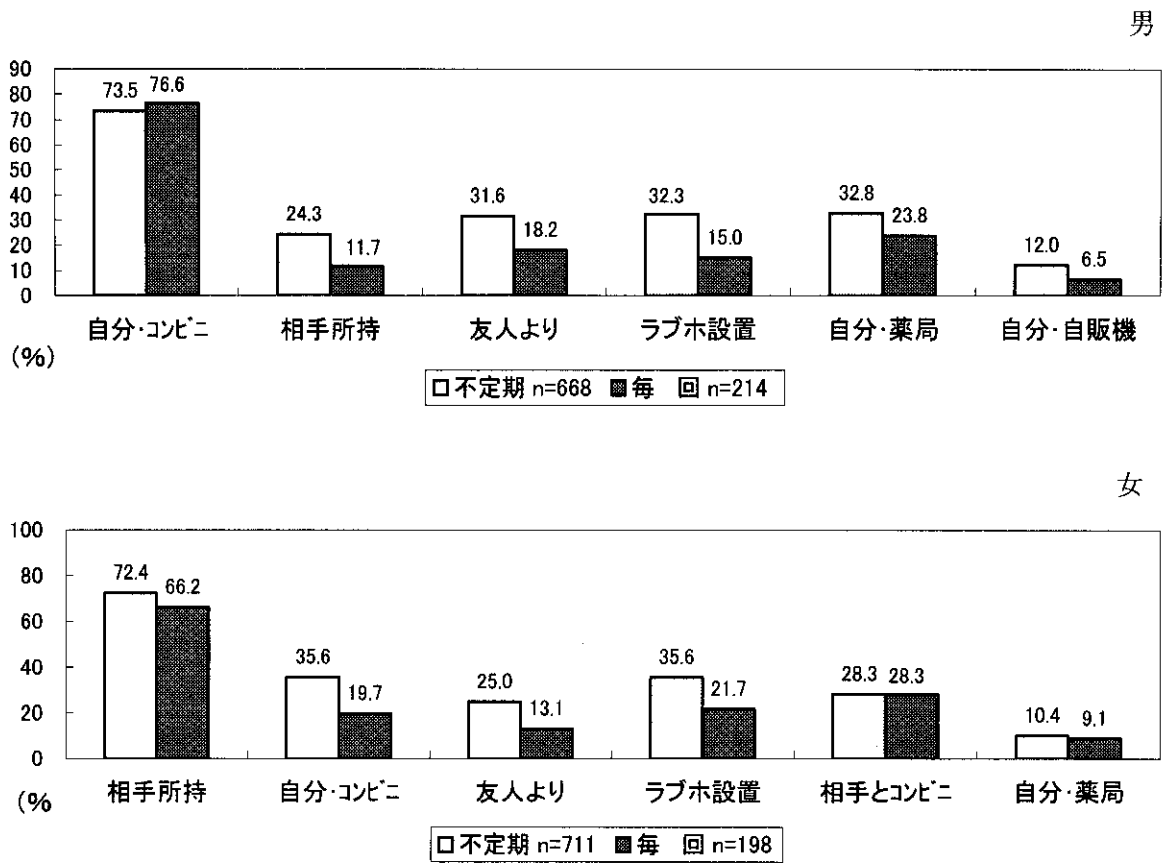


図 7.3.10 コンドーム入手方法 (複数回答)

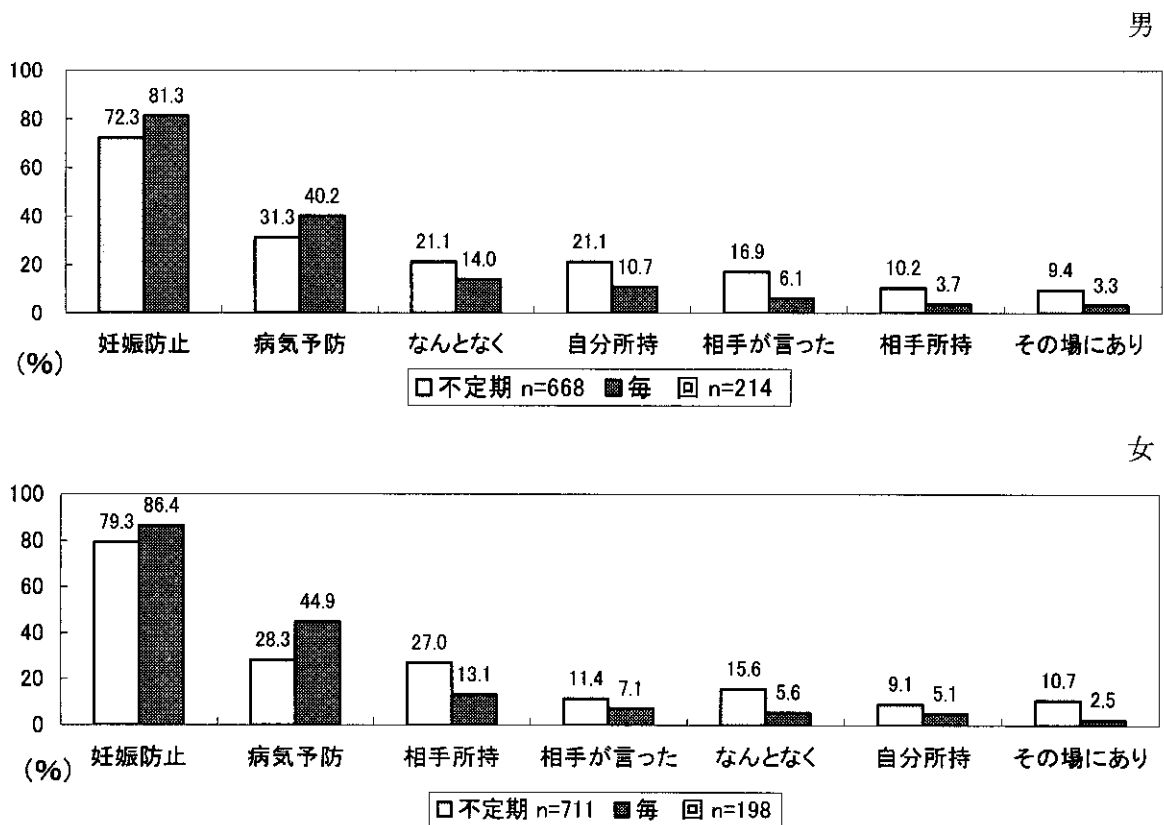


図 7.3.11 コンドーム使用理由 (複数回答)

コンドーム不使用理由

これまでのコンドーム不使用の理由(複数回答)は、男女ともに手元になかったからが一番多く(男性 38.9%、女性 37.5%)、二番目は中出ししないから(男性 29.4%、女性 35.4%)であった。男性では、自分が気持ちいいから 23.8%、決まった相手だから 22.5%と続き、女性では、決まった相手だから 26.7%、なんとなく 21.5%と続いた。

これまでのコンドーム不使用理由をコンドーム使用行動別でみると(図 7.3.12)、不定期群では中出ししないから、手元になかったから、相手が気持ちがいいから、自分が気持ちがいいからが不使用群よりも多かった。不使用群では男女ともなんとなくが不定期群よりも多く、女性は相手が使わなかったからも不定期群よりも多かった。両群とも決まった相手だからが同じくらいであった。

コンドームがはずれた・破れた経験

これまでにコンドームがはずれた経験があるのは、男性 29.9%、女性 26.6%で、破れた経験があるのは、男性 22.1%、女性 15.7%であった。

コンドームがはずれた経験をコンドーム使用行動別でみると、毎回使用群で男性 25.5%、女性 23.2%、不定期群で男性 33.1%、女性 30.0%であり、不定期群で経験者がより多かった。コンドームが破れた経験をコンドーム使用行動別でみると、毎回使用群で男性 18.8%、女性 13.1%、不定期群で男性 23.6%、女性 18.2%であり、不定期群で経験者がより多かった。

相手

これまでのセックスの相手(異性)人数が 1 人であったのは男性 14.7%、女性 22.8%、2-5 人が男性 40.5%、女性 48.7%、6-9 人が男性 12.5%、女性 12.0%、10 人以上は男性 26.5%、女性 13.6%であり、これまでのセックスの相手(同性)人数が 1 人であったのは男性 0.1%、女性 0.4%、2-5 人が男性 0.6%、6-9 人が男性 0.2%、10 人以上は男性 0.2%、女性 0.1%であった。

これまでのセックスの相手(異性)人数をコンドーム使用行動別でみると(図 7.3.13)、男性では、不使

用群で 10 人以上が最も多く、不定期群と毎回使用群では 2-5 人が多かった。女性では、全群で 2-5 人が一番多かった。

これまでのセックスの相手(複数回答)は、男女とも恋人が一番多く(男性 91.3%、女性 94.0%)、二番目に友人・知り合い(男性 44.9%、女性 36.1%)であった。次いで男性は、ナンパした・された相手 21.7%、以前つきあったことがあった相手 20.8%であり、女性は、以前つきあったことがあった相手 15.1%、ナンパした・された相手 12.9%であった。

これまでのセックスの相手をコンドーム使用行動別でみると(図 7.3.14)、全群で、恋人が一番多く、次いで友人・知り合いであった。不使用群では恋人が他の 2 群よりも少なく、毎回使用群では友人・知り合いや他の相手について他の 2 群よりも少なかった。

場所

これまでのセックスの場所(複数回答)は、男性は自分の部屋・家 82.2%、相手の部屋・家 69.0%、ラブホテル 65.0%の順であり、女性は相手の部屋・家 86.7%、ラブホテル 65.8%、自分の部屋・家 55.6%の順であった。その他にも、屋外や車内での経験も男女ともそれぞれ約 30%であり、友達の家、カラオケボックスなどでの経験もあった。

これまでのセックスの場所をコンドーム使用行動別でみると(図 7.3.15)、全群で順序の差はなく、男性は自分の部屋・家、相手の部屋・家、ラブホテル、屋外の順であり、女性は相手の部屋・家、ラブホテル、自分の部屋・家、車内の順であった。

期間

これまでのセックス相手との平均関係期間(複数回答)は、半年以内が男女とも一番多く(男性 34.9%、女性 33.8%)、1 年以内が二番目(男性 15.9%、女性 21.2%)であった。次いで男性は 1 ヶ月以内が 15.6%で女性は 1~2 年が 18.5%であった。

これまでの相手との平均関係期間をコンドーム使用行動別でみると(図 7.3.16)、男性の不使用群では

半年以内、その場限り、1ヶ月以内、2週間以内の順、不定期群では半年以内、1年以内、1ヶ月以内、1-2年の順、毎回使用群では半年以内、1-2年、1ヶ月以内、1年以内の順であった。女性の不利用群では半年以内、1ヶ月以内、その場限り、1年以内の順、不定期群では半年以内、1年以内、1-2年、1ヶ月以内の順、毎回使用群では半年以内、1年以内、1-2年、2年以上の順であった。不利用群で他の群よりも相手との関係期間がより短いことが示唆された。

妊娠・性感染症・望まないセックス・金銭のからんだセックス

これまでに自分もしくはセックスの相手に妊娠経験があったのは、男性12.5%、女性10.0%であり、同様に中絶経験があったのは、男性11.7%、女性8.2%であった。自分もしくはセックスの相手の妊娠経験をコンドーム使用行動別にみると(図7.3.17)、不利用群と不定期群で毎回使用群より経験者が多かった。

これまでに性感染症の検査の経験があったのは、男性8.0%、女性14.2%であり、性感染症と診断されたことがあったのは、男性5.8%、女性8.0%であった。これまでにHIV抗体検査の経験があったのは、男性2.9%、女性3.6%であった。性感染症についてコンドーム使用行動別でみると、不利用群や不定期群で毎回使用群より検査の経験者が多く(図7.3.18)、男性は不利用群で性感染症と診断された経験がより多く、女性は不定期群で診断された経験が多かった(図7.3.19)。

これまでに望まないセックスをした経験があったのは、男性20.8%、女性33.5%であった。望まないセックスの経験をコンドーム使用行動別でみると(図7.3.20)、不利用群と不定期群で経験者が毎回使用群より多かった。

これまでにお金を払ってセックスした経験があったのは、男性11.5%、女性0.8%であり、お金を払ってセックスした経験があったのは、男性4.7%、女性4.5%であった。お金を払ったセックス経験をコンドーム使用行動別にみると、男性の不利用群(13.0%)

や不定期群(12.9%)で、毎回使用群(8.6%)よりも経験者が多かった。お金をもらったセックス経験をコンドーム使用行動別にみると、男性の不利用群(11.3%)で不定期群(4.4%)や毎回使用群(2.9%)よりも経験者が多く、女性の不利用群(5.8%)や不定期群(5.2%)で毎回使用群(2.0%)よりも経験者が多かった。

性関連心配ごと

セックスに関してこれまでに心配したことがある事柄(複数回答)については、男女とも妊娠したかもしれないという心配が一番多く(男性37.9%、女性54.4%)、次いで、男性は特になし33.5%、自分のテクニック21.0%、相手の気持ち20.2%であり、女性は相手の気持ち27.2%、自分の体型に関すること25.9%、病気に感染したかも20.2%であった。

セックスに関してこれまでに心配したことをコンドーム使用行動別でみると(図7.3.21)、男性の不利用群では「特になし」「自分のテクニック」「妊娠したかも」「相手の気持ち」の順、不定期群では「妊娠したかも」が多く「特になし」「相手の気持ち」「自分のテクニック」の順、毎回使用群では「特になし」が多く「妊娠したかも」「自分のテクニック」「相手の気持ち」の順であった。女性の不利用群と不定期群では「妊娠したかも」が多く「相手の気持ち」「自分の体型」「病気に感染したかも」の順、毎回使用群では「特になし」が多く「妊娠したかも」「自分の体型」「相手の気持ち」の順であった。

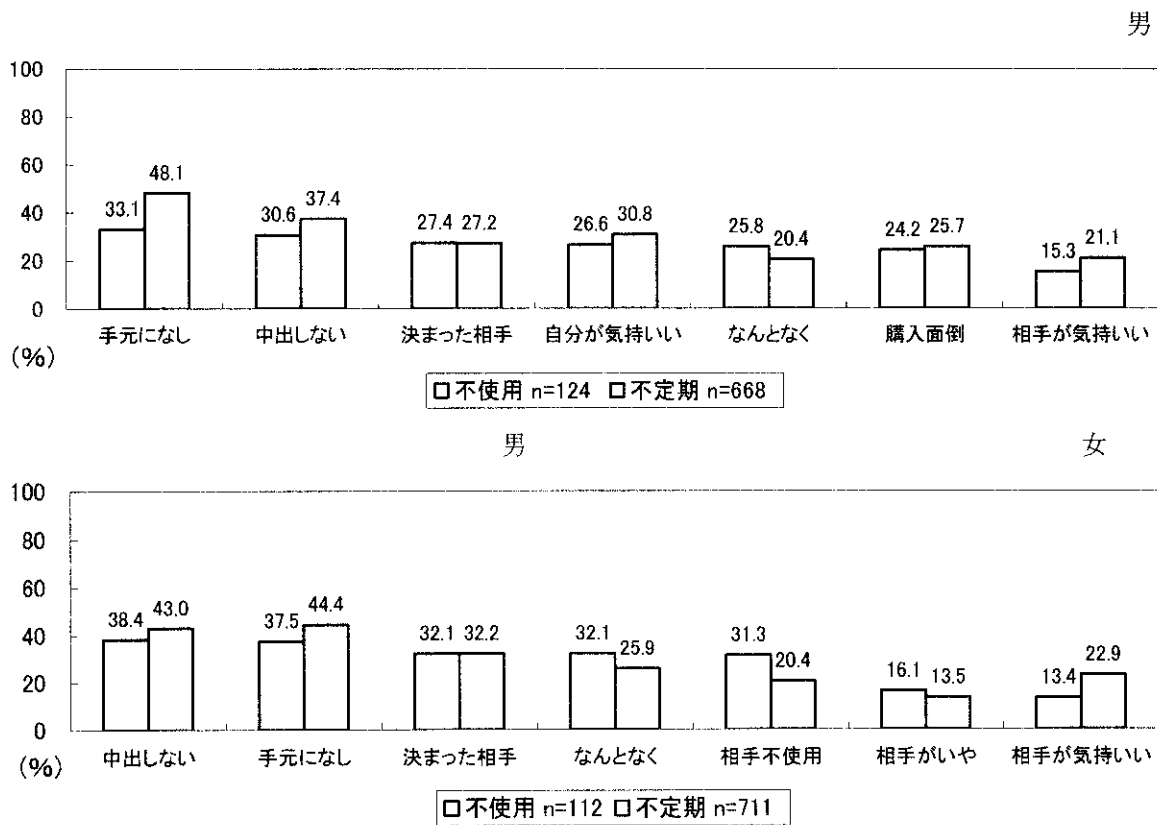


図 7.3.12 コンドーム不使用理由 (複数回答)

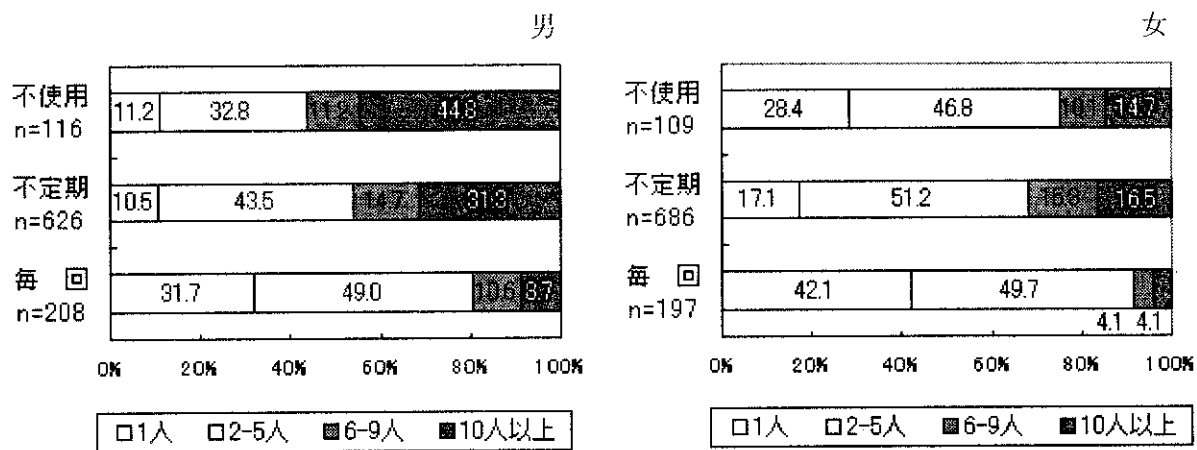
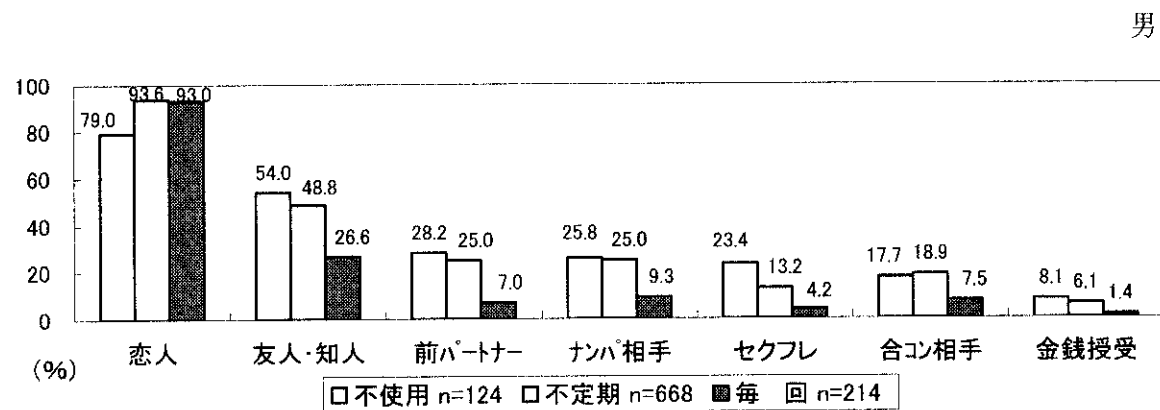


図 7.3.13 これまでのセックス相手の人数



女

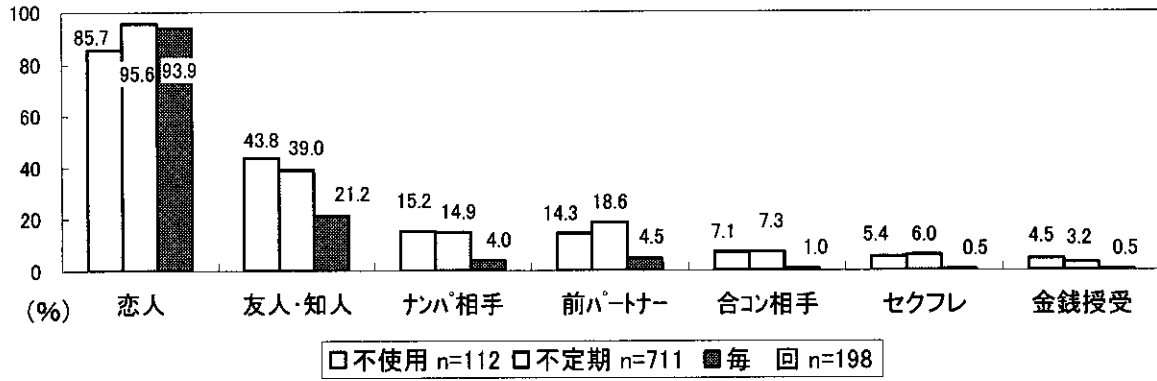
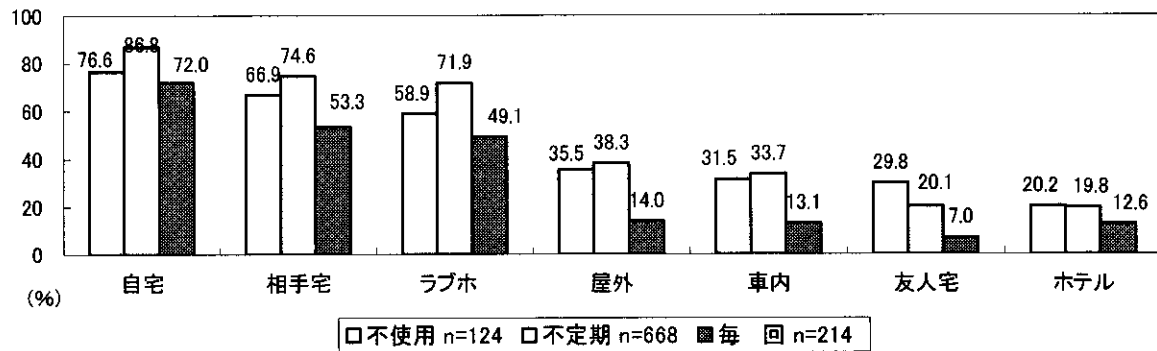


図 7.3.14 これまでのセックス相手 (複数回答)

男



女

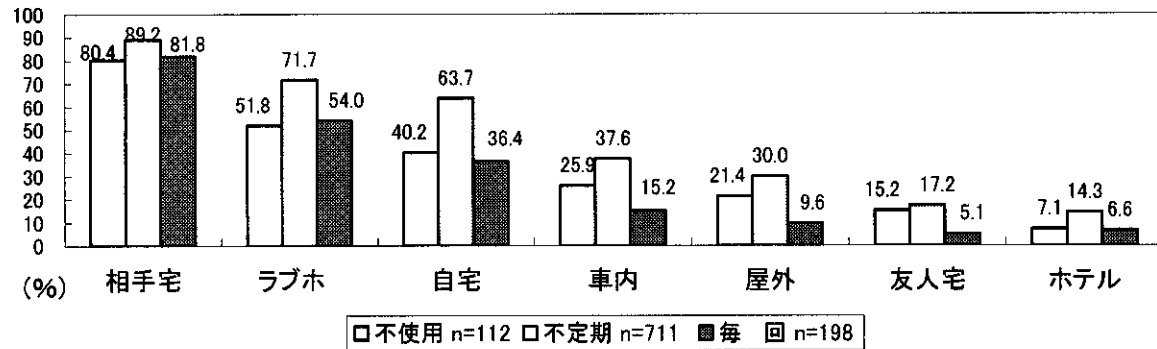
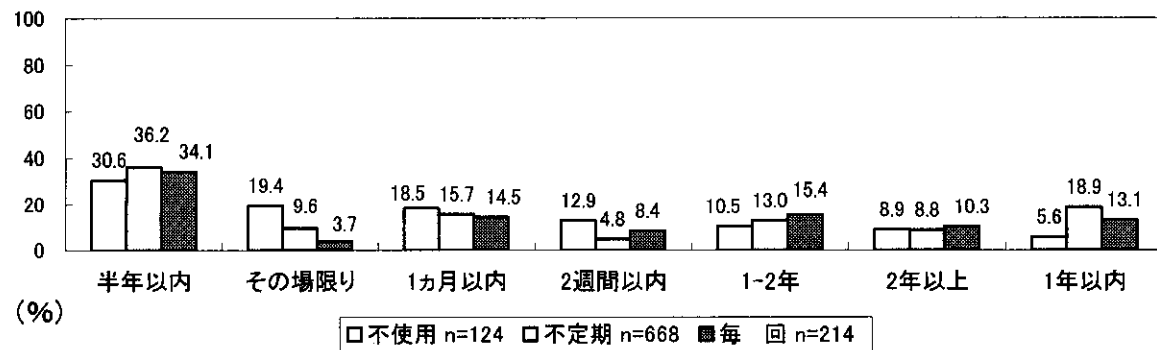


図 7.3.15 これまでのセックス場所 (複数回答)

男



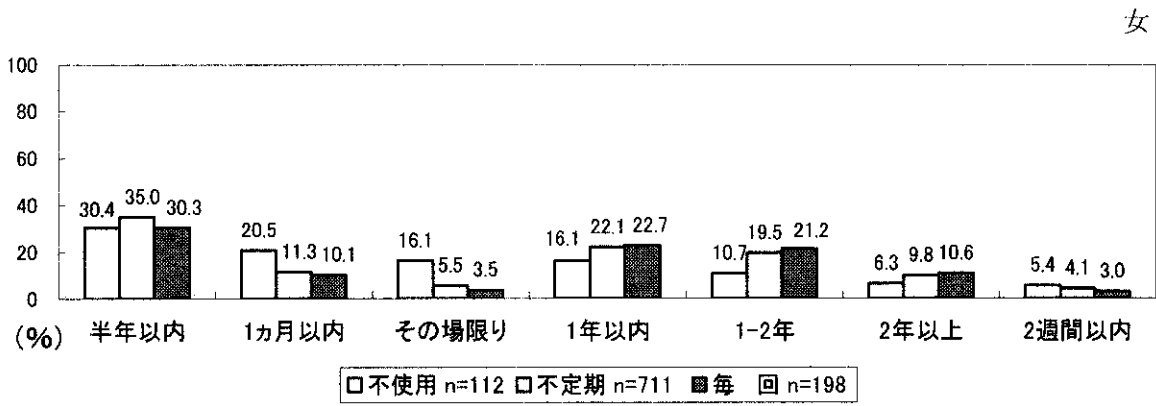


図 7.3.16 これまでのセックス相手との平均関係期間 (複数回答)

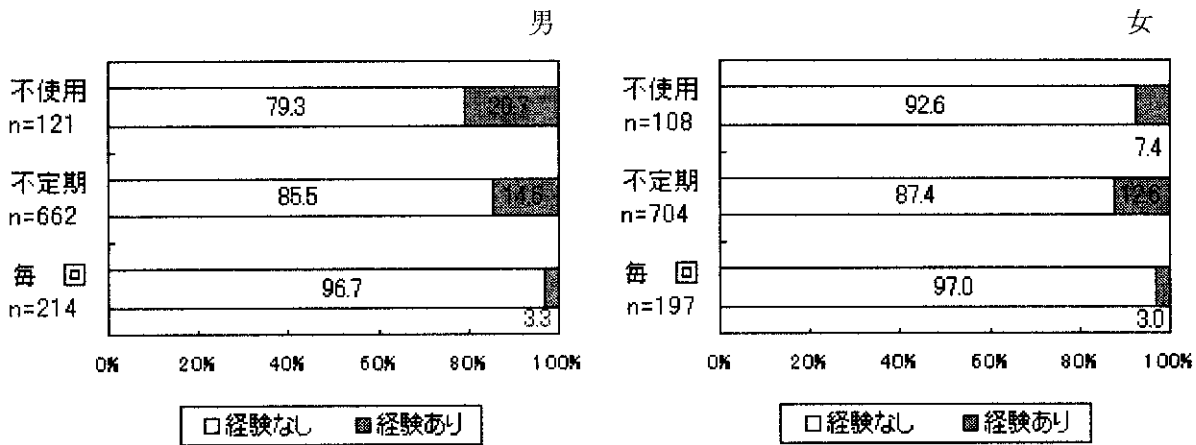


図 7.3.17 自分もしくは相手の妊娠経験

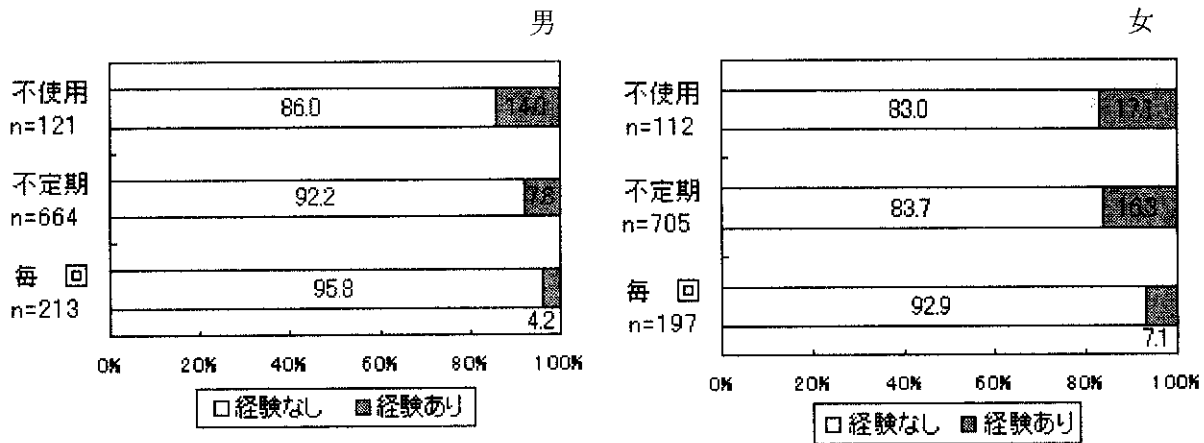


図 7.3.18 性感染症検査経験

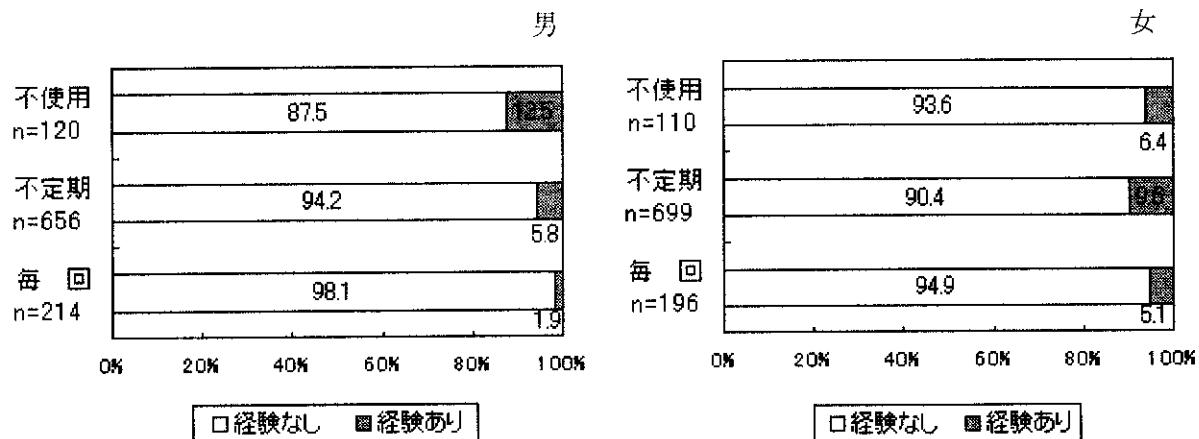


図 7.3.19 性感染症罹患経験

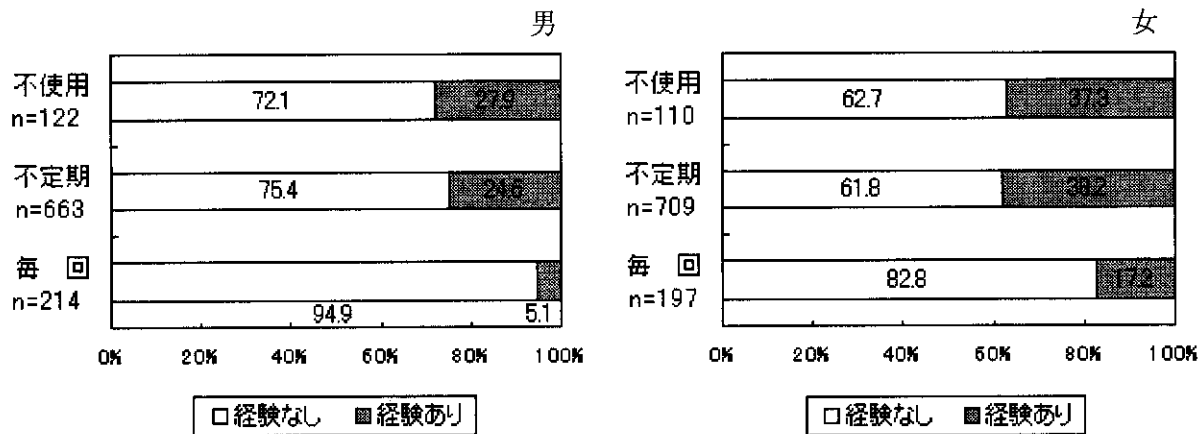


図 7.3.20 望まないセックス経験

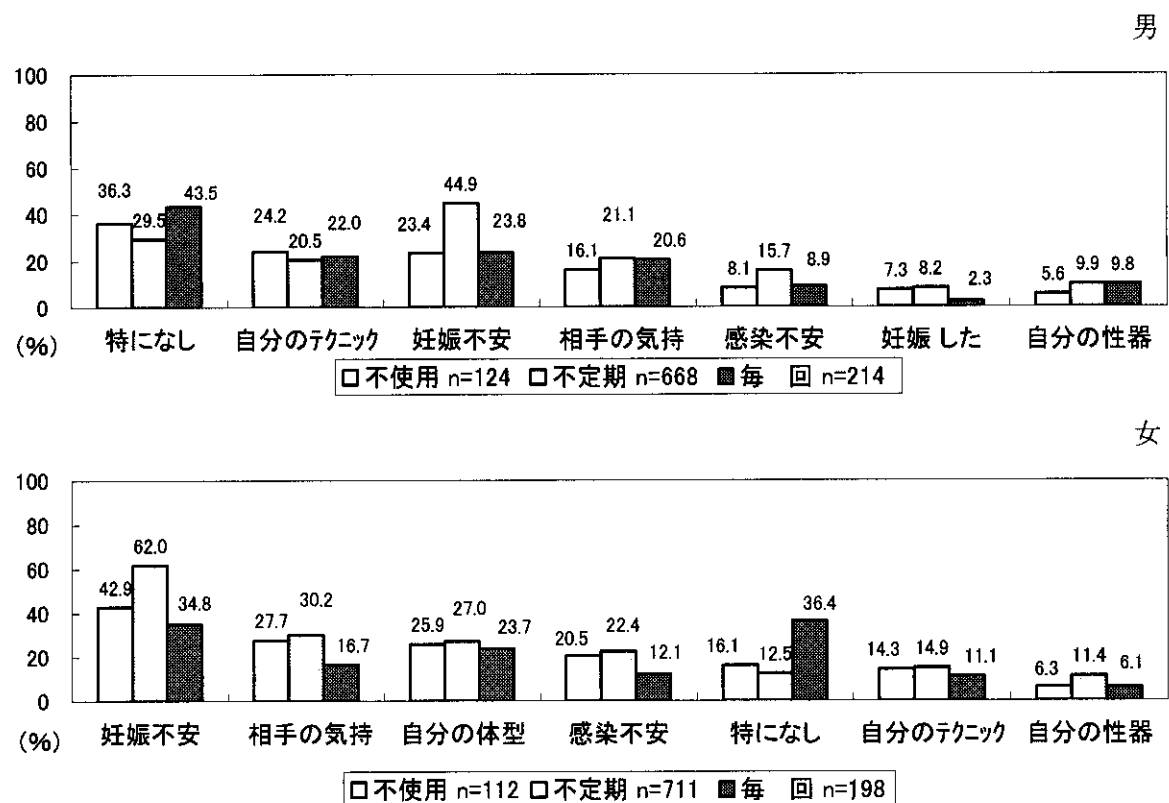


図 7.3.21 セックスに関する心配事 (複数回答)

性関連情報・話す相手

これまでに学校で性教育を受けたことがある人は、男性 94.5%、女性 96.9%であった。これまでに妊娠について情報を得たことがある人は、男性 88.7%、女性 93.6%であり、そのうち学校でその情報を得た人が一番多く(男性 71.8%、女性 79.1%)、半数以上が友達から(男性 56.1%、女性 66.3%)であり、次にテレビから(男性 36.2%、女性 41.9%)であった(複数回答)。妊娠に関する情報源についてコンドーム使用行動別

でみると(図 7.3.22)、全群で、学校、友達、テレビの順であったが、男性の不使用群では、次に恋人、親と続き、不定期群では雑誌、恋人と続き、毎回使用群では雑誌、本と続いた。女性は全群で雑誌と続き、次に不使用群では本、不定期群と毎回使用群では親と続いた。

これまでに性感染症や HIV について情報を得たことがある人は、男性 73.0%、女性 81.7%であり、そのうち学校でその情報を得た人が妊娠の情報と同じく

一番多かった(男性 74.7%、女性 81.1%)が、半数以上がテレビから(男性 52.1%、女性 50.0%)であり、続いて男性は友達から 29.1%、女性は雑誌から 28.9%であった(複数回答)。性感染症や HIV に関する情報源についてコンドーム使用行動別で見ると(図 7.3.23)、全群で、学校、テレビの順であったが、男性の不使用者では次に本、友達、雑誌が同じくらいであり、不定期群では次に友達、雑誌、本の順、毎回使用者では次に雑誌、友達、本の順であった。女性の不使用者では次に雑誌、友達、本の順、不定期群では次に友達、雑誌、本の順、毎回使用者では次に雑誌、本、友達の順であった。

セックスに関してよく話す相手(複数回答)は、男女とも同性の友達(男性 86.1%、女性 89.5%)、恋人(男性 37.8%、女性 41.2%)、異性の友達(男性 33.3%、女性 30.9%)の順であった。セックスに関してよく話す相手をコンドーム使用行動別で見ると(図 7.3.24)、全群で同性の友達、恋人、異性の友達の順であり、コンドーム使用行動に関わらず多くの人が同性の友達とセックスの話を頻繁にしていることが示唆された。

喫煙・飲酒・薬物使用

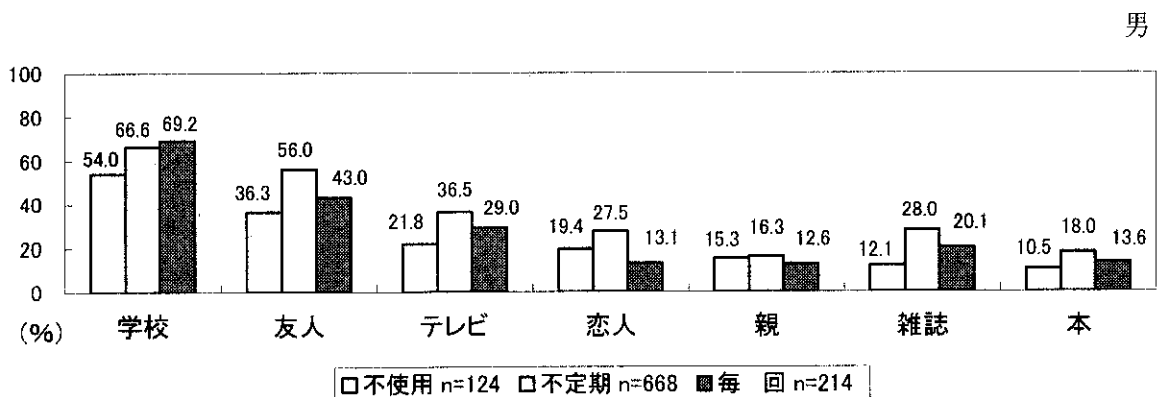
通常喫煙しているのは、男性 51.7%、女性 38.4%であり、喫煙経験のない人は、男性 11.6%、女性 21.3%であった。通常飲酒しているのは、男性 35.7%、女性 22.1%であり、飲酒経験のない人は、男性 1.8%、女性 1.7%であった。喫煙経験をコンドーム使用行動別で見ると(図 7.3.25)、不定期使用者で通常喫煙者

が他の群よりも多く、毎回使用者で未経験者が他の群よりも多かった。飲酒経験をコンドーム使用行動別で見ると(図 7.3.26)、女性は群による違いはあまり見られず、男性は不定期群で通常飲酒する人が多かった。

また、これまでに薬物使用経験があったのは、男性 23.6%、女性 13.2%であり、そのうちセックスの直前や最中に薬物使用したことがあったのは、男性 33.1%、女性 41.0%であった。使用したことのある薬物は、男女ともマリファナが一番多く(男性 66.1%、女性 56.1%)、次いでシンナー(男性 32.2%、女性 37.4%)、マッシュルーム(男性 24.9%、女性 15.1%)の順であったが、法律の規制に関わらず、その他様々な薬物の使用経験も見られた。薬物使用経験をコンドーム使用行動別で見ると(図 7.3.27)、不使用者(男性 32.5%、女性 13.5%)や不定期群(男性 26.8%、女性 15.0%)で毎回使用者(男性 9.9%、女性 6.6%)より薬物経験者が多かった。

コンドーム使用行動に係る要因

性規範、リスク認知、コンドーム使用消極的姿勢、知識得点についてコンドーム使用行動別に解析したところ、それぞれの要因とコンドーム使用行動とに関連があることが明らかになった(表 7.3.2)。



女

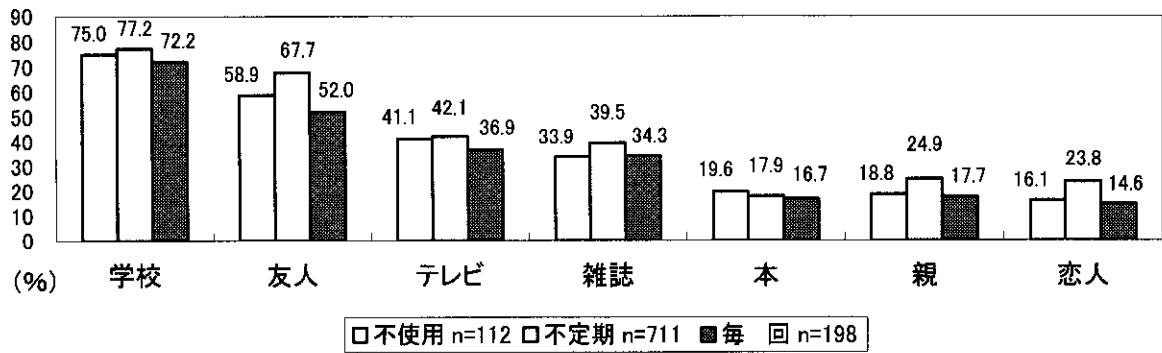


図 7.3.22 妊娠に関する情報源 (複数回答)

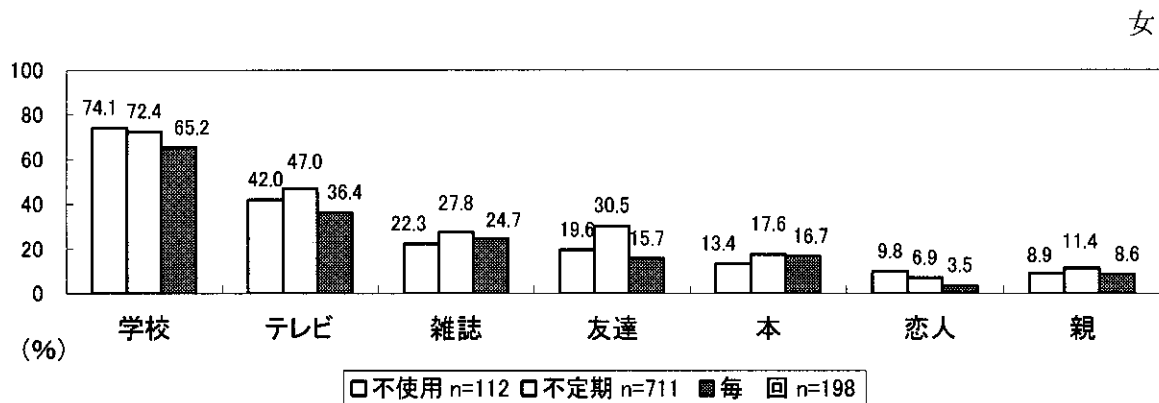
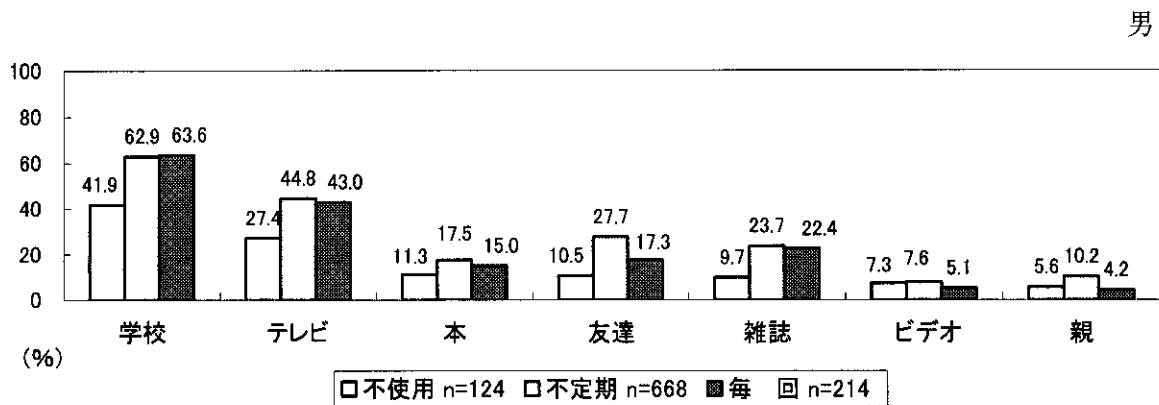
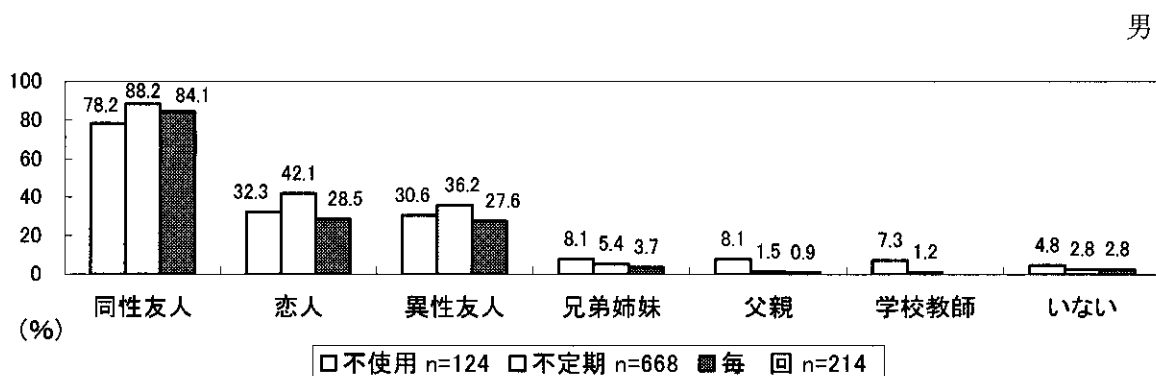


図 7.3.23 性感染症/HIVに関する情報源 (複数回答)



女

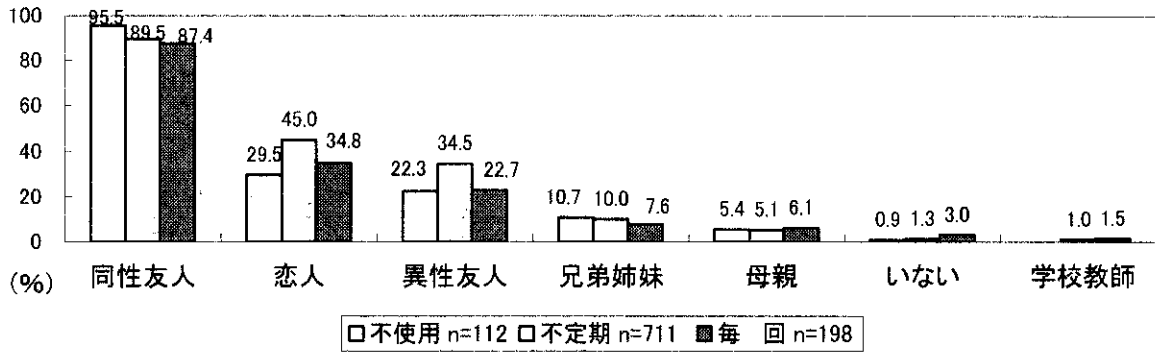


図 7.3.24 セックスについてよく話をする相手

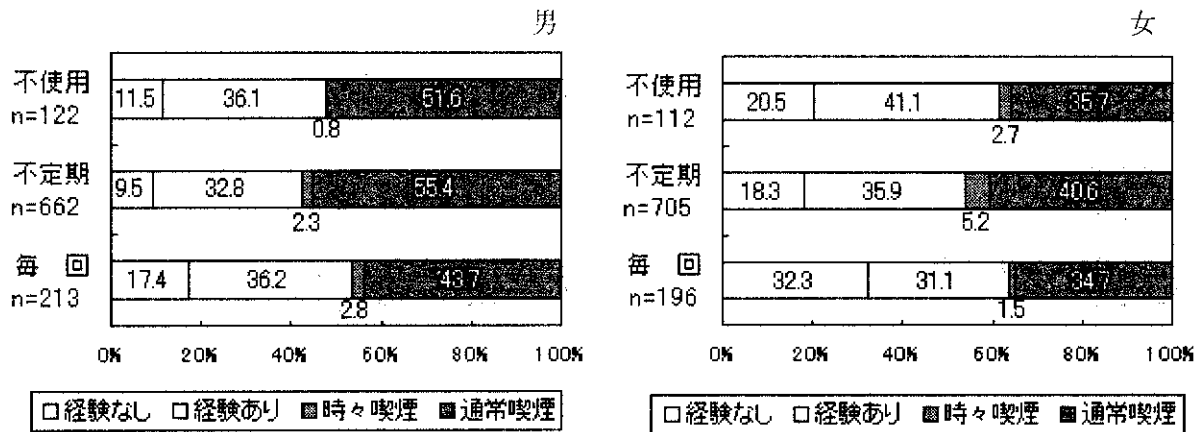


図 7.3.25 喫煙経験

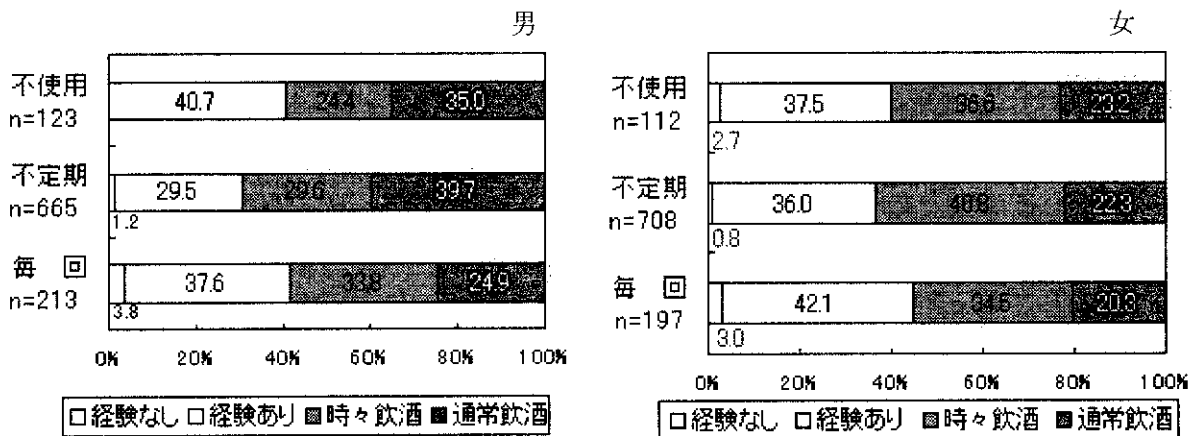


図 7.3.26 飲酒経験

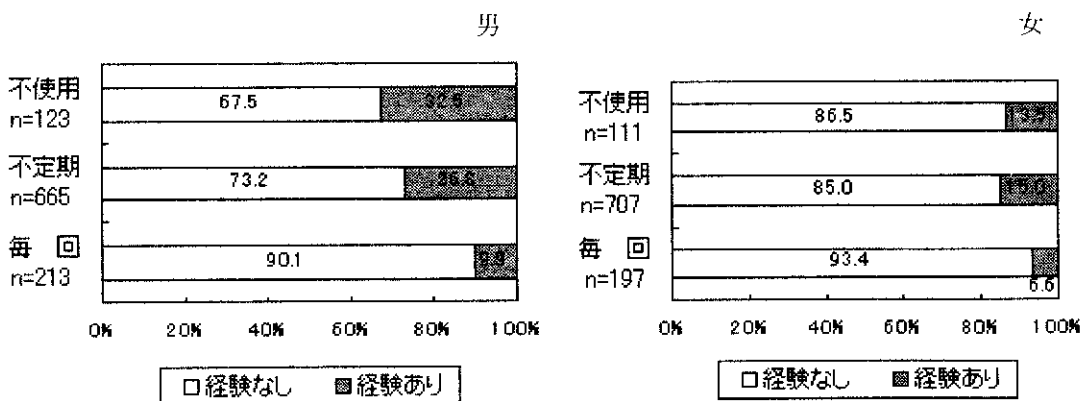


図 7.3.27 薬物使用経験

表 7.3.2 各要因とコンドーム使用行動

要因	得点範囲	コンドーム使用行動			Sig	
		不使用群	不定期使用群	毎回使用群		
性規範	15-105	男	70.82(13.37) n=109	70.12(11.98) n=629	67.62(11.57) n=202	*
		女	63.68(10.12) n=104	62.71(10.98) n=680	59.06(10.28) n=189	***
リスク認知	10-70	男	43.01(10.92) n=115	46.52(10.20) n=637	44.43(9.57) n=203	***
		女	45.88(10.44) n=107	47.49(9.89) n=691	45.61(9.57) n=190	*
コンドーム使用消極的姿勢	20-140	男	88.37(19.29) n=105	74.49(17.36) n=607	58.30(16.67) n=186	***
		女	80.53(15.46) n=96	69.05(17.68) n=671	52.33(18.24) n=183	***
知識得点	0-22	男	11.17(5.09) n=122	13.10(4.49) n=662	13.04(4.11) n=212	***
		女	11.63(4.46) n=107	13.14(4.44) n=701	12.66(4.96) n=194	**

†<.10, *<.05, **p<.01, ***p<.001

一元配置分散分析、多重比較

性規範について

不定期群や不使用群が、毎回使用群よりも有意に高い得点であり、不定期群と不使用群には有意な差はなかった。全体の「性規範」平均得点は男性 69.62 点、女性 62.14 点であり、毎回使用群のみがそれよりも低い得点であった。不使用群と不定期群のほうが、毎回使用群よりも、セックスをすることに肯定的な意味を見出していることが示唆された。また、本尺度に関しては性差があり ($p < .000$)、男性のほうが女性よりもセックスをすることに肯定的であることが示された。

リスク認知について

不定期使用群が不使用群や毎回使用群よりも高い得点であり、自らが感染リスクにあることは感じていることが、コンドームを毎回ではないが使用するという行動に関係している、もしくはコンドームをいつもは使っていないために、感染の可能性をより感じているかもしれないことが示唆された。全体の「リスク認知」平均得点は男性 45.67 点、女性 46.83 点であり、不定期使用群のみがそれよりも高い得点であった。本尺度に関しては性差があり ($p < .007$)、女性のほうが男性よりもリスクの認知度が高いことが示された。

コンドーム使用消極的姿勢について

不使用群が不定期群より、不定期群が毎回使用群より高い得点であり、それぞれの群間で得点差が有意であった。つまり、コンドーム使用頻度の低い群ほど、コンドーム使用に対して、より消極的であることが示唆された。全体の「コンドーム使用消極的姿勢」平均得点は男性 72.77 点、女性 67.07 点であり、毎回使用群のみがそれよりも低い得点であった。本尺度に関しては性差があり ($p < .000$)、男性のほうが女性よりもコンドーム使用に関して消極的であることが示された。

知識について

不定期群が不使用群よりも有意に高い得点であり、知識は高くてもコンドームを毎回使用する行動には結びついていない場合もあることが示唆された。一方、不使用群は他の 2 群よりも低い得点であり、適切な知識が不足していることがコンドーム使用行動に関係がある可能性も示唆された。全体の平均得点は男性 12.82 点、女性 12.86 点であり、不使用群はそれよりも低い得点であった。また、女性の毎回使用群も平均得点より若干低い得点であった。

結論

本調査の結果から、「若者」のセックスに関する環境や経験は多種多様であることが示された。セックスの相手や場所、及びセックスをする時のコンドームの有無、「若者」の必要性や基準に即して、コンドームを使用しようとしていることも見うけられた。また、コンドーム使用不使用行動の背景には様々な理由や要因が関係していることも示された。つまり、セックスをすることや予防行動に関して、「若者」なりのガイドラインがあることが示唆された。よって、「若者」、あるいはそこからより絞った集団には、セックスや妊娠、性感染症にかかわるその集団の規範や文化に寄り添った包括的な介入が必要である。

これまでの結果から、予防行動を支援するための実用的な情報、及び必要とされる情報やサービスへのアクセスが不足している可能性が危惧される。

「若者」がすでに実践している感染予防につながる行動を認識した上で、状況によるコンドーム使用や膈外射精といった現在実行されている避妊方法が、実際の病気予防にはつながらない可能性があること、さらに避妊にも有効性が低い等という事実を若者の現状にあわせた自己決定に活用できる方法で知らせることが重要である。また、若者が必要なときには信頼して話せる場所とつながるための情報提供も必要であると考えます。

現在、調査結果を「若者」にフィードバックしながら、必要とされている情報を提供するためにプロジェクトを実施している。フィードバックの方法は、既に調査によって明らかになった若者の望む方法で実施する計画である。それがこの集団にとって予防行動のひとつのきっかけとなることを目標に活動を展開している。

健康危険情報

該当なし。

研究発表

1. 岳中美江、日高庸晴、大森佐知子、白阪琢磨: 性経験を有する若者の HIV 感染リスク行動と要因に関する研究第 2 報-アメリカ村の若者における感染リスク行動と関連要因との関係性について-。第 16 回日本エイズ学会学術集会・総会、名古屋、2002 年 11 月
2. 大森佐知子、岳中美江、日高庸晴、白阪琢磨: 性経験を有する若者の HIV 関連リスク行動と要因に関する研究 第 1 報 アメリカ村の若者における感染リスク行動について。第 16 回日本エイズ学会学術集会・総会、名古屋、2002 年 11 月
3. Sachiko Omori, Mie Takenaka, Yasuharu Hidaka, Takuma Shirasaka: Prevalence of drug use behaviors among Japanese youth. 130th annual meeting of American Public Health Association, Philadelphia, Nov. 2002

7.4 HIV 感染症患者に対するファーマシューティカルケアに関する研究

—服薬援助とそのあり方に関する研究—

栗原 健(国立大阪病院薬剤部)
 吉野 宗宏(国立大阪病院薬剤部)
 寺門 浩之(国立国際医療センター薬剤部)
 橋本 純一(北海道大学医学部附属病院薬剤部)
 佐藤 和洋(国立仙台病院薬剤科)
 清田 雅子(新潟大学医学部附属病院薬剤部)
 下川 千賀子(石川県立中央病院薬剤部)
 長岡 宏一(国立名古屋病院薬剤科)
 畝井 浩子(広島大学医学部附属病院薬剤部)
 西野 隆(国立病院九州医療センター薬剤部)
 工藤 正樹(都立駒込病院薬剤科)

研究要旨

プロテアーゼ阻害剤(以下PI)登場後、カクテル療法でウイルスを完全に押さえ込むことに成功したことで死亡する患者は急激に減少し、治療は飛躍的に改善した。その反面、抗HIV薬の服薬は非常に難しい。副作用や耐性の問題、さらに95%以上の服薬率を維持しなければ早期に治療に失敗する等、服薬の重要性は抗HIV療法の治療の中心である。

本研究ではブロック拠点病院の薬剤師を中心に、服薬援助のあり方について検討を行い、より適切な服薬援助方法を策定する。さらに患者向け薬剤情報のあり方を検討し、薬剤情報や相互作用情報を作成し患者・医療従事者に対し提供する。また、薬の正確な副作用頻度情報を提供することを目的に、主要薬剤の副作用頻度調査を実施する。

研究の背景

1987年AZTの承認後、核酸系逆転写酵素阻害剤(以下NRTI)が数剤登場した。NRTIはウイルスを完全に押さえ込むことは出来ないまでも、また、アドヒアランスが不良であっても、ある程度の効果が得られた薬であったが、死亡率の減少に歯止めをかけるこ

とは不可能であった。数年前PIが登場し、3剤併用療法でウイルスを完全に押さえ込むことに成功したことで死亡する患者は急激に減少し、治療は飛躍的に改善した。その反面、PIを含め抗HIV薬の服薬は非常に難しい。副作用の問題、PIや非核酸系逆転写酵素阻害剤(以下NNRTI)はNRTI以上に耐性が出来やすく、95%以上の服薬率を維持しなければ、早期に耐性を獲得する等の問題がある。これは現在、先進国における抗HIV療法の大きなテーマのひとつにあげられている。また薬剤情報の不足も問題である。患者数の急増に比して、新薬の登場はめまぐるしく、また、治療技術の進歩も激しい。抗HIV薬の情報は特に患者数の少ない施設において不足している。

目的

本研究では服薬援助のあり方について検討し、より適切な服薬援助方法を策定する。さらに患者向け薬剤情報のあり方を検討し、薬剤情報や相互作用情報を作成し、患者・医療従事者に対し提供することを目的とする。

研究方法

今年度も引き続き、各ブロック拠点病院で行われている服薬援助の実際について検討し、問題点の整理を行った。また、昨年度作成した患者アンケートを実施した。

結果

1) 各施設における服薬援助について

① 国立国際医療センター

<施設の現状>

- ・登録患者数:1069名(2002年9月30日現在)
- ・性別:男性958名、女性111名
- ・病期:AC780名、AIDS289名
- ・感染経路別:男性同性間性的接触 542名
- 異性間性的接触 243名
- 輸血・凝固因子製剤等 248名

母子感染 4 名

その他 32 名

・院外処方せん発行状況(2002 年 10 月)

院外処方せん枚数:372 枚

院内処方せん枚数:160 枚

発行率 :69.9%

<主な活動内容>

・ACC 患者ノート 2003 年版作成に伴う薬剤情報の改訂を、コーディネーターと共に作業中。

<その他>

・初感染患者では STI(計画的治療中断療法)を導入するケースもあった。

・d4T による乳酸アシドーシスを警戒し、初回治療に AZT が使用されるケースが増加した。

②北海道大学医学部付属病院

<施設の現状>

・患者延べ人数 90 人、現在の通院患者 57 人、服薬中の患者 44 人

・原則として院外処方。院内処方 8~10 人、未投薬 11 人(平成 14 年 10 月末現在)

<主な活動内容>

・患者からの希望時に説明を実施。
・今後も、服薬導入時や薬剤変更時に連携をとり、服薬指導を実施する予定である。
・服薬指導は相談室個室を利用。

③新潟大学医学部付属病院

<施設の現状>

通院患者数:16 名

服薬 7 名(全て院内処方)、未服薬 6 名、中断 3 名

薬剤の変更件数(H14 年度):1 件

<主な活動内容>

・第 10 回関東甲信越 HIV 感染症講習会:医師・薬剤師対象

・北関東甲信越 HIV 感染症歯科医師講習会:歯科医師対象

<その他>

・HIV+HCV 併発例における Peg-IFN+リバビリンの臨床研究に 1 名参加予定

④石川県立中央病院

<施設の現状>

担当薬剤師 2 名

患者数 23 名、服薬 13 名、未服薬 7 名、

薬剤中止 3 名、新規服用開始 2 名、薬剤変更 2 名

<主な活動内容>

・服薬指導(服薬開始前、服薬開始時、その他医師、看護師、患者からの依頼時)

・HIV/AIDS 北陸ブロック内拠点病院薬剤師服薬指導検討会の開催

・広島大学医学部附属病院 畷井浩子:服薬援助の実際:平成 13 年度 3 月 8 日

・平成 14 年度は平成 15 年 3 月に開催予定。

・カンファレンスの参加(月 1 回)

・看護部の 1 日研修において、看護師対象に薬剤の説明

<その他>

・金沢大学院生の HIV 実習の受け入れ(平成 14 年 2 月 2 名 2 週間)

・平成 14 年 9 月 9 日国立療養所福井病院において「HIV 治療薬の理解」について講演

・平成 14 年 11 月 16 日 HIV/AIDS 拠点病院会議において「最新の抗 HIV 薬」について講演

・「おくすり情報シート」追補版の作成を予定

⑤国立名古屋病院

<施設の現状>

・患者数:211 名(平成 14 年 10 月現在)

<主な活動内容>

・平成 14 年 9 月より薬剤科で EFV 血中濃度測定開始

・院外薬局(名鉄調剤薬局)との連携

・抗 HIV 薬の副作用早見表の作成

・日和見感染症治療法早見表の作成

・ブラジル人の患者会への参加

ロピナビル、エファビレンツ、テノフォビルについて情報提供

- ・HIVカンファレンス(外部公開)
「カレトラの血中濃度測定」
- ・学会発表
第57回国立病院・療養所総合医学会、第16回日本エイズ学会

<現在の問題点>

- ・外国人問題
(平成14年10月現在外国人患者:59名)
通訳者を介した服薬指導を実施しているが、常時可能ではない。
通訳者を介しているため、理解度が測りにくい。

⑥国立大阪病院

<施設の現状>

- ・患者数:380名(平成14年10月現在)
- ・院外処方:平成13年12月より発行開始。平成14年10月より全面発行に向けて案内中。院外処方せんを受け取っている患者は、平成14年11月現在40名で、約20%の発行率である。
- ・服薬指導状況:(外来)指導患者数291名。約50名/月(平成14年11月現在)(入院)8~10名/月

<主な活動内容>

- ・入院・外来カンファレンスを各1回/週実施
- ・平成14年11月9日、平成14年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業成果発表会「抗HIV療法の医療体制とその現状—最新の抗HIV療法と服薬支援—」を実施。
- ・平成15年2月、医師・薬剤師・看護婦を対象に服薬援助研修会実施予定
- ・資料作成(クスリカード、抗HIV薬Q&A集等)
- ・学会発表(国際エイズ会議、日本エイズ学会等)

<その他>

- ・今後の課題として、院外処方の発行推進、治験への取り組み、抗HIV薬の血中濃度測定に関する班研究等をさらに充実させることとしている。

⑧広島大学医学部附属病院・広島市民病院

<施設の現状>

- ・患者数:35名
- ・服薬中の患者:23名
- ・院外処方:約50%発行。院外処方箋を受け付けている薬局と、定期的に勉強会を行い、情報共有を行っている。
- ・服薬指導:診療科の問診室で行う

<主な活動内容>

- ・スタッフミーティングへの参加
広島大学医学部附属病院・広島市民病院・県立広島病院の医師、薬剤師、看護師、臨床心理士、MSW
- ・院内カンファレンス(1回/週)
医師、薬剤師、看護師、臨床心理士、MSW
- ・中四国ブロック拠点病院薬剤師のための服薬指導研修会を今年度は2回開催予定
- ・看護研修会への協力
- ・広島薬剤師HIV勉強会(1回/1-2ヶ月)
- ・資料作成(おくすり情報、相互作用表)
- ・学会発表:日本薬学会 第122年会、第16回日本エイズ学会学術大会
- ・投稿:医薬ジャーナル

<今年度の抗HIV療法の動向>

- ・長期投与患者では、HIVのコントロールより、高血糖や高脂質血症、リポジストロフィーなどの副作用の問題が大きい。
- ・血友病患者では肝障害の問題が大きい。
- ・今年度、新規に服薬を開始した患者さんはいない。

<今後の課題>

- ・ブロック拠点病院(3施設)以外の病院および調剤薬局へのエイズに関する知識の普及
- ・他院に対する針刺し事故などの場合における、薬剤提供に関するシステムの普及
- ・相互作用表、おくすり情報の内容を更新
- ・中国四国ブロック内の患者把握

⑨国立病院九州医療センター

<施設の現状>

- ・患者数:103 名(平成 14 年 10 月現在)
- ・院外処方:実施を検討中

<主な活動内容>

- ・患者数の増加に伴い、外来診療日を従来の月・火・木曜日に金曜日を加えた週 4 日で外来を行われた関係から、外来服薬援助も同様に週 4 日体制で実施。

⑩都立駒込病院

<施設の現状>

- ・外来患者数
月平均 600 人～700 人の患者が受診、内抗 HIV 薬服薬患者は約 70%。

- ・入院患者数 月平均 約 10 人
- ・担当薬剤師:入院担当 2 名、外来担当 3 名(入院担当と併任)

(服薬指導状況)

- ・外来指導件数(薬剤開始時・変更時のみ)平成 14 年 10 月現在 60 件。
1 回の指導時間は 60 分～90 分、感染外来の個室を使用、必要時 PHS 対応。

- ・入院患者
月平均 5～10 人 病棟薬剤管理指導業務として服薬指導を実施。
- ・カンファレンスは、入院・外来ともに参加

<主な活動内容>

- ・2002/07 薬剤科における研修会で薬剤師による講義
- ・2002/06 病棟看護師における研修会で薬剤師による講義
- ・エイズ拠点病院における他病院の看護師一週間研修で、「抗 HIV 薬について」薬剤師による講義(月 1 回程度、看護師 1～2 名)
- ・中・四国ブロック薬剤師研修会で、「駒込病院における薬剤師の服薬援助」を紹介
- ・第 16 回エイズ学会にて発表

<その他>

- ・12 月 1 日より、60 日処方患者を対象に、院外処方箋発行開始(患者 50 人程度)
地域保険薬局との連携を高める。(在庫確保、更生医療申請、服薬説明等)

服薬援助のための援助ツール

- ①薬剤導入用服薬援助文書(国立名古屋)
- ②クスリカード(国立大阪)
- ③抗 HIV 薬 Q&A(国立大阪)
- ④抗 HIV 薬一覧表(国立大阪)
- ⑤相互作用一覧(広島大学)
- ⑥一般薬相互作用一覧(国立名古屋)
- ⑦お薬情報シート(石川県立中央)

2) 患者アンケート調査

目的

抗 HIV 薬の服薬は抗 HIV 療法の中で重要な位置を占めているが、服薬の確実性と継続は患者に大きなストレスを与えている。変化する患者ニーズを把握し、服薬援助の方法について検討することを目的に、抗 HIV 薬による副作用発現状況と服薬状況ならびに患者が求める情報等について調査を行った。

方法

調査期間は平成 14 年 5～10 月。全国のブロック拠点病院と都内拠点病院に通院する患者を対象に受診時にアンケート用紙を配布し、郵送にて回収を行った。年齢、性別、HIV-RNA ウイルス量、CD4 細胞数、薬の組み合わせ、副作用、過去 1 ヶ月間の服薬状況、服薬困難な理由、服薬を続けていくための条件等について調査を実施し、結果について集計・解析を行った。

結果

アンケート配布枚数は 580 枚、回収枚数は 336 枚で回収率は 57.9%であった。

年齢別では 30 代の患者が最も多く 125 名 38%、次いで 40 代、50 代、20 代の順であった。男女別では男性が 305 名 91%、女性が 27 名 8%。基礎疾患別では血友病 75 名 22%、その他の感染経路の患者は 249 名

74%であった。服薬期間別に患者分布を見たところ、対象患者の服薬期間のバラツキは少ないものと思われた(図 7.4.1)。

対象患者のウイルス量は 50 コピー未満が全体の約 75%。CD4 細胞数は 200 個以上の患者が約 75%を占めていた。初回治療と同じ組み合わせの患者は全体の約 40%で約 60%の患者は組み合わせの変更を経験していた(図 7.4.2)。現在の生活への支障の有無を聞いたところ、ありと答えた患者は約 30%であった。また、その理由を聞いたところ、服薬期間が 1 年未満の患者では消化器症状が、1 年から 3 年未満の患者では精神神経系副作用が、5 年を超えると筋肉のやせ、8 年以上の群では体がだるい等の全身症状が生活への支障の主な理由であるとの回答であった。副作用を相談できる相手がいると答えた患者は約 65%で、いないと答えた患者は約 15%であった。主な相談相手は医師、看護師、薬剤師であった(図 7.4.3)。過去 1 ヶ月間の服薬状況を聞いたところ、飲み忘れはなかったと答えた患者は 230 名 68%で、飲み忘れが 1 回あったと答えた患者は 57 名 17%であった。これを別の質問で聞いた各患者の服用回数で除し、服薬率を算出したところ、95%以上服薬していた患者は全体の 94%であり、94%以下の患者は 4%であった(図 7.4.4)。服薬の工夫について聞いたところ、約 50%の患者が何らかの工夫をしていた。実際にどの様な工夫がされているか質問したところ、順に携帯等のアラームを鳴らす、ピルケースを利用する、テーブル・食卓の上など決まった所に薬を置く、食後に服用する、薬を持ち歩く、家族・友人に確認してもらう、時間を決めて服用する等であった。少数意見ではあったが、薬を自宅と職場に分散する、飲み物を決めて服用する、夕食時薬用コップに水を入れておき、薬を飲んでいればコップの水が減っている、といった回答に工夫が見られた(図 7.4.5)。服薬を中止したいと思ったことがある患者は全体の約 35%で、その主な理由は副作用を中心とした、薬に関するものであった。服薬期間が短い群では、消化器系の副

作用や薬の大きさが主な理由としてあげられ、服薬期間が 6 ヶ月以上の群では、疾患の問題等から発生する精神的な理由をあげる患者が多く見られた。分類が 3 ヶ月の次に 6 ヶ月となったのは、自由回答としたにもかかわらず、回答がこの期間で分かれた結果によるものである(図 7.4.6)。服薬を困難にする理由を聞いたところ、薬をずっと飲み続けなければならぬことをあげる患者が最も多く 154 回答 19%であった。次いで、薬が大きくて飲みにくい 114 回答 14%、将来の副作用への不安、他人の目が気になる、副作用が強い、1 回量が多いなどの理由が続いた(表 7.4.7)。服薬を続ける為の条件は自分の意志を第一にあげる患者が多く 214 名 22%。次いで、服薬を習慣化する 152 名 16%、薬の効果 129 名 13%、治療法を信頼する 95 名 10%であった(図 7.4.8)。

考察

今回対象となった抗 HIV 薬を服用する患者の約 75%は、CD4 細胞数が $200/\mu\text{l}$ 以上あり、HIV-RNA ウイルス量も 50copies/ml 以下であったことから、対象となった患者群の抗 HIV 法は、概ね良好な経過で推移していると考えられた。95%以上の服薬率を保つ患者は約 95%で、約 50%の患者は飲み忘れを防ぐための工夫をしており、日本におけるアドヒアランスの高さが伺われた。薬剤の変更を経験していた患者は 56%。約 30%の患者が、現在の生活に支障があると答えていた。相談できる相手のいない患者は約 15%で、HAART の困難さが伺われた。約 35%の患者は服薬を中止したいと思ったことがあった。治療開始 3 ヶ月までの主な理由は副作用であった。6 ヶ月を経過した群では疾患を原因とした精神的なものであった。治療開始からの時期を考慮した、効果的な患者サポートが求められると思われた。服薬を困難にする理由として、当院で行った 1998 年の調査結果の主な理由は、食後・食間に気を使う 60%、大きくて飲みにくい 43%、副作用 40%、1 回量が多い 37%、将来の副作用が心配 14%であった。治療薬の中心が NFV であ

ったこと等の理由から、食事の影響を気にする患者が多かったものと思われた。今回の調査では EFV が治療の中心になったことや、近年長期服用による副作用が問題となっていること等から、服薬を困難にする理由は「食後・食間が気になる」から「服薬継続」や「未知の副作用」に対する不安へと変化していたものと考えられた。服薬を続けるための条件には、依然、自分の意志をあげた患者が多く、服薬が容易になった現在でも、自己決定を尊重したアドヒアランスの重要性が再確認された。

<調査協力施設>

石川県立中央病院、愛媛大学医学部附属病院、国立国際医療センター、国立仙台病院、国立名古屋病院、東京医科大学附属病院、東京大学医科学研究所附属病院、東京都立駒込病院、新潟大学医学部附属病院、広島大学医学部附属病院、広島市民病院、県立広島病院、北海道大学医学部附属病院、国立大阪病院(順不同)

考察

1) 各拠点病院での服薬援助について

外来患者に対する服薬援助は、本研究開始後 3 年で、研究協力全施設で実施された。研究を通じた援助技術交流の結果、その援助水準にも差はなくなった。また、本研究で内容の検討を行った援助用資料は上記項目 6 のとおり。これら情報は、薬剤情報の適切な提供に資するものと思われた。大都市圏での患者増加に対する院外処方箋発行等の取り組みは、各施設に波及するものと思われ、各地方薬剤師会との連携を考えた本研究班の取り組みは、他の拠点病院が取り組む際のひとつの基準となるものと思われた。各地区で開催された薬剤師研修会には、カウ

セリングを取り入れるなど、他疾患の研修会では見られない内容を盛り込むことができ、良質なファーマシューティカルケアの提供並びに援助技術の向上が期待できた。

2) アンケート調査結果について

結果の考察は先に述べたとおりである。今般のアンケート調査結果の中で質問した、薬剤の容器等に関する問題を整理し、今後本研究班を通じて、各製薬企業団体に対し要望書を提出し、よりよい患者ケアに貢献したいと考える。

結論

本研究を通じて、各施設での服薬援助の水準は高まった。施設によって、患者数の差はあるものの、その服薬援助の内容は充実していた。各ブロックではその特色を生かした服薬援助が行われており、ノウハウや情報を交換することにより、さらに幅の広い服薬援助が実施可能であることが確認された。今年度実施したアンケート調査で、現在行われているファーマシューティカルケアが十分効果を発揮していることが確認された。今後、患者数が増加するに従って、同レベルの医療水準を保つことが困難である可能性は否定できない。また、HIV 感染症患者の診療を行う施設の増加に伴い、今後、良質なファーマシューティカルケアの提供には研修会等の開催は必須である。増大する患者に対し、本研究班で検討した患者用薬剤情報資料を活用することで、よりよい医療に貢献できるものとする。

健康危険情報

該当なし。